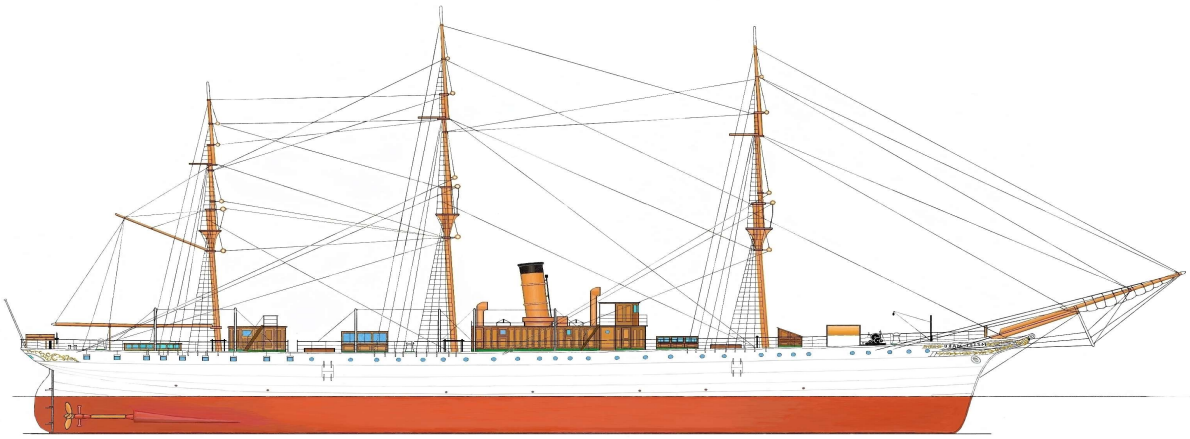
Ocean

海洋塾機関誌第12号



日本海洋塾のURL　　Ocean記載のURL

平成31年4月10日

特定非営利活動法人　日本海洋塾
日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§平成 30 年度活動状況及び平成 31・令和元年度活動計画のお知らせ§

理事長　都築雅彦

桜の話題がマスコミで報じられる時期になると、法人を預かる者には年度更新の業務が気掛かりになってくるもので、公式のものは、決算書と事業報告、次年度の活動計画の総会での承認となりますが、会員諸氏には事前に概要をお知らせすることとしました。

ご存知のように今年の日本には元号の改元があり、4 月 1 日に日内閣官房長官から「新しい元号は「令和」であります」との発表があり、5 月以降の年度名が決まりましたので、4月からの年度は、平成31年・令和元年度となりました。

1、平成30年度の活動概況報告

当年度の活動は、今日までに関連した事業への確実な定着を目的に、関係先と一体になった活動を意識してきました。

中でも、活動の主力である「明治丸保守業務」については、大学とも打ち合わせながら展示部品の取り外し点検整備等をも手掛けるようになり（通年事業）、真鍮製品の汚損除去による復旧などにより船内雰囲気が少し変わりました。

また、平成29年度に引き続き、海洋会ボランティアクラブ会員向けの「ガイドブック（改訂版）」の作成（通年事業）を、クラブ会員の協力を得ながら5分冊に完成、納品しております。

海洋会ボランティアクラブから引き継いだ形の「明治丸グッズ販売」も例年のペースで売り上げています。

第 4 四半期には、江東区観光協会が企画する「まちあるきツアー」（桜の花見と区内の文化財を回るツアー）のため、観光協会ガイドの新人に対する明治丸の研修、ツアーガイドに対する研修会、3 月下旬のツアー受け入れを実施しました。

2、30年度の活動損益予測

当年度の事業活動は、まずまず順調に推移したため、事業収支もほぼバランスが取れたものと予測しています。

収益としては：

会費収入	（管理部門事業・受取り会費）	（100 千円）
明治丸保守	（整備保全事業）	（930 千円）
ガイドブック作成	（文化財利活用事業）	（250 千円）
物品販売	（文化財利活用事業）	（150 千円）
支部業務	（管理部門事業）	（90 千円）
講演料等雑収	（管理部門事業）	（50 千円）（計 1,570 千円）

を予測しています。

費用としては、前年とほぼ同額（1,500 千円）を予測しており、当期の経常増減はほとんど生じないと予測されます。

3、平成31･令和元年度（次年度）の事業計画

当年度については、海洋会の財政改善のために越中島支部の活動内容が改変されることとなり、これに伴い越中島支部からの委託業務が削減されることとなりました。

また、海洋会ボランティアクラブからの委託業務も無くなることから、収益は平成30年度に対し2割ほど減収することが予測されます。

そこで、収支バランスをとるために、経常費用の2割削減を目標に緊縮財政とすることとしました。

定常となっている業務活動については、定着するための対応力を高めるとともに、活動の関係者との関係を密にし、その中から新規事業への進出と確保を目指すこととします。

主な事業である明治丸については、3 月末よりニッパク装備による木甲板シールの補修（やり替え）を実施中であり、工事の進展に合わせた保守作業を実施することとします。

加えて、船橋、便所などの甲板室側壁（木部）の腐朽がかなり進んでいるため、損傷の状況確認も実施することとします。

また、従来と同じような形態で実施してきた明治丸関連グッズの販売については、販売形態を見直し、来館者を含め、より多くの人々の目に触れ、購買意欲が高まるような手法を検討することとします。

しかしながら、当面は苦しい経営状態が続くことが想定されるため、会員全体の諸氏からも支援協力を得ながら対応していくことといたしますので、よろしくお願いいたします。

以上

§海洋塾会員の活動についての一考察§

正会員　北沢昌永

月刊海洋という雑誌がある。海洋出版株式会社の出版物である。
2018 年５，６月号特集として〔海洋酸性化と、地球温暖化に対する沿岸、近海域の生態系の応答〕がある。
関係大学、専門研究機関の識者が調査、研究結果を発表している。
いずれもかなり広範囲にわたる研究結果をもとに相当な危機感を以て警告を発している。

2019 年 1 月号には東京海洋大学の東海正教授が「東シナ海、黄海における漁獲動向と、資源管理について」を寄稿している。そこでは特に資源管理の重要性に触れられている。

月刊海洋では主として海洋生物の消長についての外的影響を取り上げている。
殊にマイクロプラステイックの水生生物への影響が深刻である事、そしてこの影響が食物連鎖の末、人類への健康影響が懸念されている。いや単なる懸念ではなく恐怖のイメージがあるとしている。

環境保全については多くの識者、研究者の警告論調があるが、海と直接関係がある団体、機関に所属している者達が果たして声を大きくして叫び、海の環境保全のため実際に行動しているであろうか？
年に数回、海と海岸を愛する有志が携わっているビーチクリーンアップ活動も小さな、空しいキャンペーンのように思えるのだ。

人類が作り出したプラステイックの総生産量は既に 3 億トンを超え、その一部が海洋に流れ込み、総量１・５億トンにものぼったとされている。　水圏に流れ込んだプラステイックは浮遊沈殿しながら劣化,分解、細粒化し、再び浮遊する。この小さな粒子はマイクロプラステイック（MP）とよばれる。

生物への影響に関する研究は始まったばかりだが、全世界の海の貝,牡蠣、エビ、カニなどの消化管から MP が検出されている。
イースター島周り海の魚の体内からさえもマイクロプラステイックが検出されている。

MP の有害性は稚魚に対する多くの室内実験でも確かめられている。

有数な海洋リゾートが大量のプラステイック製品や、その残骸によって汚染されている実態が報道されている。　例えばインドネシア・バリ島周辺の海岸に打ち上げられたプラ製品の多さが問題化している。楽しいダイヴィングスポーツの場であり、奇魚マンタを追った楽しみが失われつつある。

九州大学農学部の大島雄治教授は「Mp の生物に対する影響の研究は危急を要し、重要性が高い。今後、この問題に多くの研究者が関心を持ってもらいたい」と強調されている。

この他に地球温暖化による海面上昇、両極氷塊の消滅等が大問題となっていることは周知の事実で,これらは国際会議でも取り上げられ、議論が始まっているが、国際的協調が必ずしもなされていない状況にある。

顧みて我々はどうなんだ？海洋塾会員はキャンペーンの先頭に立って海洋の危機に対峙し、公益活動に力を注ぐべきではなかろうか。

有志の忌憚なき意見、提案を切に待ち望んでいる

2019 年 3 月３日

§明治丸修復工事の概要（４）その他の工事§

正会員　望月二朗

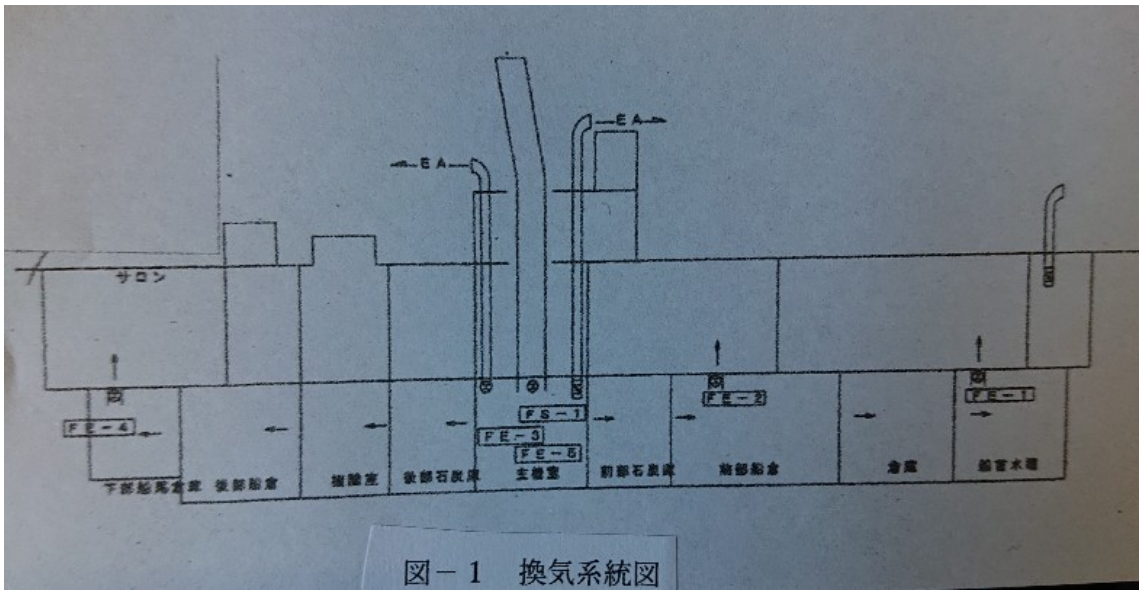
前回まで３回、明治丸の修復工事の概要を紹介してきた。この項をもって最終回とする。

仕様書では「雑工事」であるが、「その他の工事」として船内換気設備工事と避雷針換装工事について概要を紹介する。

1.　船倉内換気設備工事

当初の仕様には明記されていなかったが、工事担当者定例会議で、船内の前部客室天窓・機関室天窓等の建具は､雨仕舞い対策のため全て固定窓とし密閉するので、特に通風換気は必要であることが徹底された。

船内に淀みがないように換気計算を行い空気の流れを確保する。（図１換気系統図）



図－１　換気系統図

更に､船倉内に地下水が出てきているために、空気を撹拌して湿度を下げる換気設備を設置する。

以上の用件を満たす工事が行われた。

(1)　缶室天井煙突下部に吸気ファン新設・・煙突下部鋼甲板に開口(φ600mm)の上、グレーチング新設、開口部に補強のためにカーリング施工した。ファン・・３相 200V 1台　(FS-1)

(2)　排気ファン新設工事

1. 水夫室床面の船首水槽点検蓋に排気ファン設置　　単相 100V　1台　　(FE-1)
２. 前部船倉倉口に排気ファン設置　　3相 200V　1台　　(FE-2)
３. サロン床面の点検蓋に排気ファン設置　　3相 200V　1台　(FE-4)

上記の２台(EF-1. EF-2)のファンは、船倉の床面に鉄骨の枠を組み立て、既設の隔壁の換気口を利用し、作業員が通行する際や荷物の運搬時には、一時移動できるように設置した。新たに鉄材を加工すると隔壁の強度を弱くすることになる。

(3)　排気ファン新替工事　缶室天井通風筒下部の既設排気ファン(4 台)を撤去し、下記の排気ファンを設置した。

右舷前部通風筒　　単相 200V　1 台　　(FE-5)

左舷後部通風筒　　単相 100V　1 台　　(FE-3)

＊船倉内の除湿器(片吸い込みシロッコファン)の設置　缶室に床置排気ファン(手動)　　2 台

缶室前部船倉と後部船倉に設置した。

(4)　通風筒ダンパー新設工事

１．缶室内左舷前部及び右舷後部通風筒下部にダンパー新設　　２箇所

２．水夫室、火夫室通風筒にダンパー新設　　各１箇所

(5)　配線工事　配電盤より各ファンまで電線敷設　EM ケーブル　合計 225m

(6)　機関室上部展示室床及び客室(サロン)後部に木製グレーチングを設置した。

機関室上部　　440m×1600m　　米松　床のキャンバーを考慮して 2 分割

客室サロン　　770m×755m　　米松

＊原設計では、グレーチングの風切り音が発生したので開口部の面積を考慮し、船首・船尾の排気ファンの容量を調節した。

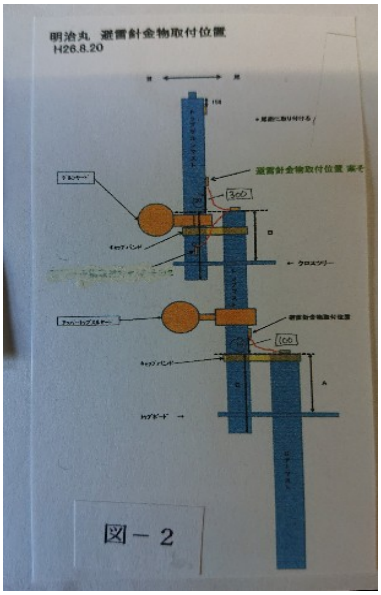
容量を調節しても撹拌目的のための影響は少ない。原設計では、風速 3m／sec 程度であるが、ファンの容量を調節したため、設計上風速 2m／sec となった。

上記、5 台の排気ファンは、船内の空気の撹拌目的のため 24 時間運転とする。

２．避雷針の換装工事

修復前は、各マスト(木製)の頂部(トラック)から避雷導線によって接地していた。「避雷針は、重要文化財のため建築基準法の設置義務はなく、通常、本体内には電気を通さないことになっている」と文化財建造物保存協会担当(明治丸修復工事監理者)より指摘された。

今回の工事で、既設の大部分のマスト・ヤードを木製から鋼製に更新したことにより、マスト・トップの風見鶏(避雷針)からマスト本体を避雷針として利用し、船倉部分にコンクリートがあるため船体下部の目立たない部分より接地した。



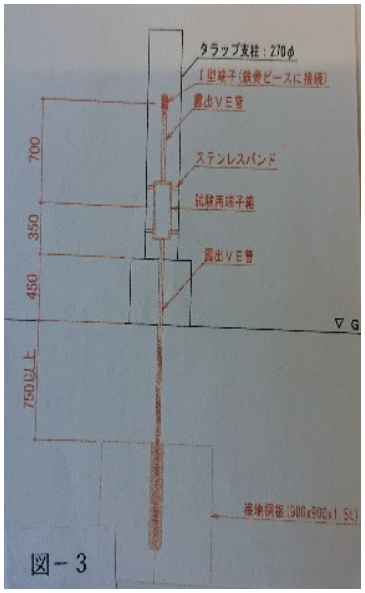


図２において、導線は、各マストの上部マストの船尾側下部に取付けた接続金具と下部のマストの頂部に取付けた接続金具を結ぶように取付けた。（台風時などヤードの旋回が 35°可能）

導線の材質は、アルミ撚り線を使用した。ロアーマストからデッキ面までの導通検査で、導通を確認した。

船体に接続している乗専用タラップの支柱に接続端子を取付け、地中に埋設した接地銅板を介して接地した。

結び

以上、4 回にわたり明治丸の修復工事の概要を述べてきたが、工事に協力出来た筆者の感想としては、重要文化財に指定された本船は世界的に見ても現存する極めて数少ない鉄船で、材質と共にリベット構造であり、造船史上極めて大切な（世界的）産業遺産としての価値を実感することが出来た。

現在、本船は船底基部を地中に埋設した状況であり、地中の鉄材の腐食が絶え間なく続いている訳で、我々、訪船客を案内していても常に心に掛っている。

今回の修復工事において、折角船体上部は綺麗な姿を再現したが、今ひとつ願うのは船体と水の縁を切ってドライな状態で保存すべきではないかと考える。我が国の基幹産業である海運業を支えてきた多くの海事関係者を育成してきた本船に対する価値評価を、文化国家として再度考慮すべきときであると思慮する。

更に耐震診断が今回実施されなかった理由について、提出された修理国庫補助事業の要望資料によれば、「明治丸基盤整備工事（昭和 60 年 3 月）により、船体を支持するための船台及び支持杭等の工事を施工しているため。また船底部に入れないため、避難誘導確保が出来ている。」としている。

この点についても、関東・東海地方に比較的近未来に大地震の発生が予想されている現在、明治丸の恒久的保存対策として早急に実施すべき事案であると思量する。

§男声合唱団「シンサーンズ」§

正会員　松﨑　光男

小生は、現在、男声合唱団「シンサーンズ」に所属し、トップテナー・パートの一員として男声合唱を楽しんでいる。

男声合唱団「シンサーンズ」は、1970 年代初めに、香港の日系駐在員の合唱経験者が集まって、自然発生的に始まった合唱団で、名前の「シンサーンズ」は、香港が英国の租借地であった当時の、香港の公用語の一つであった「広東語」に由来する。

広東語では,英語の Mr.に当たる男性の呼称を「先生」と書き「シンサン」と発音する。例えば、「松﨑先生」と書き、「松﨑シンサン」と云う。　男性ばかりの合唱団であるので、この「シンサン」を複数形に捩って、団名を「シンサーンズ」としたものである。

（因みに、Mrs.は、「太太」と書き、「タイタイ」と云う。決して、は体を表す？などとは言いません！）

§　出会い

1978 年に、勤務していた損保会社の香港駐在員として赴任、会社が法人メンバーであったので、現地進出企業の駐在員が中心となって構成する「香港日本人倶楽部」に、自動的に会員となった。**（赴任の際に乗った JAL の機関士が、偶然にも、東京商船大の機関科同期生であった）**

銀行・保険その他金融機関、商社、海運・航空、生産会社、建築・土木、報道機関、等々、様々な日本企業が既に進出しており、駐在員等の邦人が、家族を含め約 7,000 名、香港日本人学校の生徒が、小・中合せて約 1,100 名で、海外の日本人学校ではバンコックに次いで大きかったと記憶する。

丁度、中国では文革が終わり、ヴェトナム戦争が終結した頃で、中国からは「紅衛兵くずれ」、ヴェトナムからは「ボート・ピープル」と称する難民が、国境を超えて香港に流入し、強盗やスリが多くて治安は良くなかったが、街には活気が溢れていた時期であった。

当時の香港は、中国への唯一の窓口であり、中国に入国しようとする人は、香港の中国関係機関（**英国統治下であり、正式な領事館などの外交機関は無く、新華社、中国銀行、等の中国系企業が、外交機関の役目を果たしていた**）に入国申請し、長ければ 1 週間程度の後に承認されると、香港と広州を結ぶ直通専用列車に乗り、その中で入国手続きが行われることになっていた。従って、当時の香港は、中国に関する情報が漏れてくる貴重な場所として、特に、新聞社の支局、特派員が情報（諜報？）活動を行っている、エキサイティングな場でもあった。

その頃、日本では、今と違って「歌詞のみ」がテレビスクリーンに映る「カラオケ」が流行っており、漸く、香港の「日本人が通う夜の街」にも導入され始めた時期であった。ご多聞にもれず、現地の邦人企業間の接待の場にも頻繁に利用されたが、何しろ小さい街であり、邦人が行ける比較的安全な（ボッタクリが無い）店は限られるので、ライバル会社と同じ店で出くわすことは、しょっちゅう起こったが、そこは、「武士は相身互い」で、見て見ぬふりをするのが習わしとなっていた。

赴任して半年ほどが過ぎ、駐在員生活にも慣れてきた頃、「カラオケ」付ナイトクラブで客先接待中に、現地で海運業を営んでいた顔見知りの邦人（**元 K-Line の神戸商船大の先輩**）と出会ってしまった。「武士は相見互い」の作法どおり、その夜はお互いに小さく会釈を交わす程度で終わったが、後日、その会社を営業訪問すると、先輩から「お前、歌、歌えるのか？」と訊かれた。　小生の「カラオケ」を、ちゃんと聴いていたらしい。　「まぁ、好きですけど」などと会話が進むうちに、「実は、日本人倶楽部に、男声合唱のグループがあり、自分もメンバーであるが、人員不足なので次回の練習から参加しろ」と云うことになってしまった。「カラオケ」でリクルートされた訳である。これを機会に、仕事関係ばかりでなく、仕事とは直接関係ない企業の方々との繋がりも駐在員生活には必要だろうと考えて、参加することにしたのが、「シンサーンズ」であった。

香港日本人学校の音楽教師や、早稲田のグリー、慶応のワグネル、関西学院グリー、上智、横国大、等々、学生時代に相当「男声合唱」に嵌っていた錚々たるメンバー、二十数名から成る男声合唱団で、練習場は日本人学校の音楽室、指揮者は三菱商事の方であった。（**三菱商事の合唱団は、後に、この方の指揮で、実業団全国コンクールで一位になった。**）

小生は、小学校の頃に、正式な名前は忘れたが、NHK が放送していた「子供のど自慢」のような番組に、日比谷公会堂で出演しで合格の鐘を叩いてもらったり、民放の同じような番組で、千代田区の代表に選ばれたり、中学・高校では音楽部に所属し、独唱や合唱の経験はあったが、大学では、ご存知の「寮歌」専門で、正式に男声合唱などしたことも無く、最初は戸惑ったが、トップテナー・パートの一員として歌ううちに、直ぐに慣れて、日本人倶楽部の「音楽会」や「クリスマス会」等で歌い、残りの駐在期間、約 2 年半は結構楽しんだ。

§　香港の「シンサーンズ」その後

駐在期間が終了して帰国し、数年が経った頃、突然、昔の「シンサーンズ」のメンバーから電話があり、「帰国したメンバーが、また歌いたいと云っているので、一度集ま

らないか」との誘いであった。　丸の内近辺勤務の人達が多かったので、年に1,2度集まっては、昔話と合唱を楽しんだ。その中で、最近の香港の男声合唱は、歌い手が減り、あまり活動していないようだとの話が出て、皆で「シンサーンズ」はどうなったかと心配した。

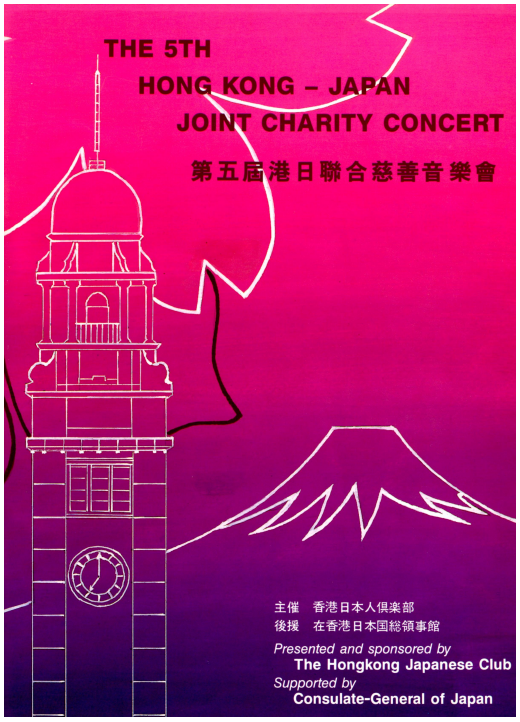
更に数年が過ぎ、小生に、二度目の香港駐在の機会が巡ってきた。1997 年の英国による99年間の租借期間が終わるすこし前の、1990年のことである。

1984年から1990年の再赴任までの7年間、海外との保険取引の仕事をしており、香港へは年に1～2回は出張していたので、街の様子は分かっていたが、赴任して再び「香港日本人倶楽部」の会員になってみると、音楽部は女性に占拠？され、男声合唱団「シンサーンズ」は消滅、男性は女性主体の混声合唱団に組み込まれていることが判明、愕然とした。

香港の中国への返還を間近に控え、1990 年頃から英国は香港に蓄財した資金を、地下鉄や自動車トンネル、新空港などの巨大インフラ投資に回し、香港人からの「持ち逃げ批判」を避ける一方、それらの事業は総て英系企業が請け負って資金を回収する巧妙な手段を講じており、総てが騒然とし始めた時期であった。

小生を男声合唱に引き込んだ、**元K-Lineの神戸商船大の先輩**をはじめ、香港に根を下ろして起業した邦人も、企業を畳んで既に日本に引き上げた一方、返還後の中国との関係を睨んで、日系企業の駐在員の数も増加し、入れ替わりも激しくなっており、「シンサーンズ」が自然消滅状態になったのも無理からぬものと思えた。

とは言え、小生は、取り敢えず、女性主体の「混声合唱団」のテナー・パートに復帰した。「香港日本人倶楽部」は、1980年代の終わり頃から、音楽を通しての社会貢献を謳い、毎年、現地のオーケストラ及び合唱団と一緒に「チャリティーコンサート」を開催しており、小生も「香港日本人倶楽部・音楽部」の混声合唱団の一員として、1991年及び1992年3月の「チャリティーコンサート」に出演した。



1991 年 3 月開催のコンサートには、JAL の協力で、日本から、テノール歌手の「五十嵐喜芳・麻利江」父・娘を、1992 年 3 月開催のコンサートには、ソプラノ歌手の「島田祐子」を夫々招いて、会場を盛り上げた。

（上に表示したコンサートのプログラム、右側の 1992 年のものは、小生がデザインし、手書きしたもので、日本と香港のジョイントコンサートであることを表わそうと、日本を代表する

「富士山」と「桜」及び、香港のランドマーク、「昔の九広鉄道（九龍と広州を結ぶ鉄道）の「尖沙咀（ﾁﾑｼｬｰﾂｲ）駅」にあった尖沙咀鐘楼」（時計塔）と香港の花「バウヒニア（俗に　香港蘭と云われる）」を組み合わせた、時計台の 7 時は、コンサートの開演時間を示したものです）

この「チャリティーコンサート」は、日本総領事館が後援し、日本人商工会議所、現地企業・個人などが協力し、入場料や多額の寄付金を総て現地の慈善事業団体に寄付しており、現地では、新聞等でも報道されて非常に感謝されていた催しであった。

§　日本での「シンサーンズ」再結成

2 年間の駐在が終わり帰国したが、仕事に紛れて男声合唱からは疎遠になり、10 年近くが過ぎた頃、また昔の仲間から電話があり、帰国した「シンサーンズ」経験の駐在員が東京に大分溜まったので、ここで「シンサーンズ」を再結成したいので参加しないかとの話であった。　賛意を伝え、暫くすると、取り敢えず歌うことにしたので、新大久保の、或る「時間借りスタジオ」に集合するようにとの連絡があった。

20 名程が集まり、旧交を温め、昔歌った曲を歌った。その後不定期に 2～3 回集まった後、正式に、男声合唱団「シンサーンズ」を再結成しようと云うことになり、会則の作成、東京都合唱連盟への加入、等を決め、団員 23 名にて新生「**香港日本男声合唱団ザ・シンサーンズ**」の活動が始まった。時は流れ、2006 年 1 月のことであった。　団名は、香港発祥の男声合唱団であることを意識して「香港日本」と付けたが、外部への説明が大変であった。

東京都合唱連盟等が主催する各種コンクールやフェスティバルに、年４回程度出演し、結構良い評価を受け、賞状や記念品を頂けるようになったが、やはり「音のヴォリューム」（人数）が必要であろうとの結論になり、論議の結果「旧香港駐在員で構成」と云う謳い文句は捨てて、外資導入を図るべきとの結論を得、2010 年 3 月から、名称も「**男声合唱団シンサーンズ**」と変更して香港色を薄め、外部から男声合唱好きの人材を集め、現在は、団員 43 名を擁する男声合唱団となり、コンクールで都知事賞、講評者特別賞、等を何度も受賞している。

しかし、どこぞの「ボランティアクラブ」と同様、月日の流れは止められず、団員の自然年齢は進み、嘗ての紅顔可憐？な青年達も爺さんとなり、現在は、最高齢者 89 歳、平均年齢は 76 歳となっているが、全員元気で練習とその後の「一杯」に励んでいる。

我が団の指揮者（嘗ては、某有名工務店香港駐在員）は、男声合唱の世界では、「編曲」で有名なご仁で、彼が、団のメンバーの音域に合せて編曲した曲を歌っている。　香港をテーマにした有名な映画「慕情」の主題歌は、コンサートの幕開けに歌う曲となっているほか、さだまさし、山田拓郎、井上陽水、AKB48、等の曲があるかと思えば、春日八郎、新沼謙治、等の歌謡曲、独逸リード、宗教曲、黒人霊歌、等、歌うジャンル、曲目は多岐に亘り、英語は勿論、イタリア語、ドイツ語、中国語、等、言語も多岐に亘

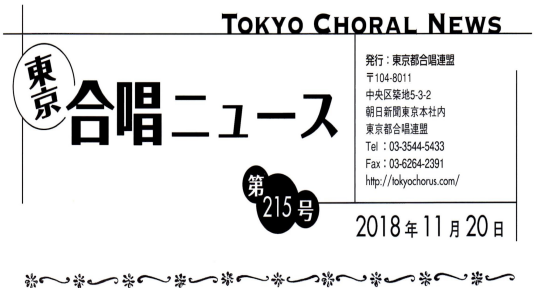
る。　団員の中には夫々の言語に精通した教授や先生がいて、発音等の指導も受けながら、楽しく練習している。

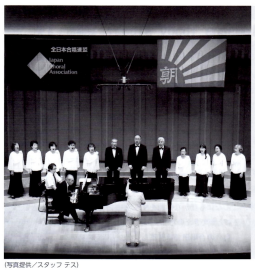
「場外戦ばかりでなく、せめて一回くらいは単独のコンサートを開催しよう」との意見が出て、「それでは一生の想い出に」と云うことで、**「冥土の土産コンサート」**と称し、2011 年に、代々木初台の「オペラシティー」小ホールにて、第 1 回目コンサートを開催したところ、超満員の 400 人近い聴衆が来てくれた。　好評だったので、欲が出て、その後はサントリーホールにて 2 年に一回の割で、既に 3 回開催し、2019 年 6 月には、通算第 5 回目となる**「冥土の土産コンサート」**を、同じくサントリーホールで開催する予定で準備している。

（前列、左から 4 番目が小生）

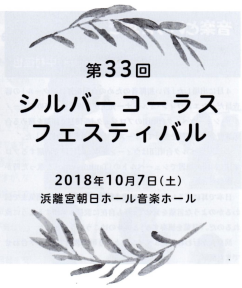
練習は、毎週月曜日の夕方 6 時半から 2 時間、新大久保の、有名な？通称「いけめん通り」に面した古い戸建ての２階にある練習場を安く確保し、団員関係者の奥方で国立音大出の専属女性ピアニストに伴奏をお願いして、活動している。

2017 年 11 月に開催された、東京都合唱連盟主催の、第 32 回「シルバーコーラス　フェスティバル」に 3 位入賞、今年（2018 年）第 33 回は、招待演奏に選ばれて、大トリを飾った。





（写真提供／スタッフ テス）



シルバーコーラスフェスティバルは、前日に閉場となった築地市場の向かいの浜離宮朝日ホールでの開催。今年は48団体が出場し、これまでにない熱いイベントとなりました。ズのリズムを楽しませてくれました。演奏後、代表の青柳さんにお話を伺ったところ「創団当初から本番は1回も欠かさず参加していて、合唱は人生そのものです。これから

ができた一日だったに違いありません。

今回の参加団体の内訳を見てみると、なんと7団体が開催33回のうち30回以上出場のほぼ皆勤。その一方で、8つの初出場団体がありました。初出場団体のひとつ「荏原混声合唱団」は、なんと昭和36年に品川区の合唱団として発足した50年以上の歴史がある団。2曲のプログラムを全員暗譜でしっかり演奏してくださいました。1曲目の「聞こえる」（新実徳英 作曲）は団員の皆さんの気持ちが一つになってしっかりと伝わってくる演奏、また2曲目の『A Little Jazz Mass』より「Kyrie」（Chilcott 作曲）ではしゃれたジャ

新しく歌い始めるような気持ちで頑張ってほしい」との激励の言葉をいただきました。

講評の~~後、この日の大トリを~~飾ったのは昨年の出演団体から選ばれた「男声合唱団シンサーンズ」。表現力豊かな大人の男声合唱で思わず胸がキュンとしてしまう箇所もあり、シルバー合唱独特の味わい深さを堪能することができました。そんなこんな魅力いっぱいのシルバーコーラス、来年も一層の熱気に包まれるフェスティバルとなりますように、多くの皆さんのご出演、ご来場をお待ちしております！

（C.E）

5

（最新の、東京都合唱連盟「合唱ニュース」に載った記事の抜粋）

香港での、**元K-Lineの神戸商船大の先輩（現在は札幌のタクシー会社の経営者）**との出会いから始まった、男声合唱の世界との遭遇を大切にして、今後も更に何回かの**「冥土の土産コンサート」**に、出演する積りでいる。

以上

§温故知新§

正会員　小島　茂

『海洋会』は一九二〇年（大正九年）、当時の商船学校（後の東京高等商船学校）と、神戸高等商船学校をまたぐ校友会として、発足した。来年、百周年を迎える。

記念事業として、変色したり、ボロボロになりかかった、発足以前からの会誌を含め全九百十一巻、ＣＤ化し、残すことになった。掲載された、主要論文、論説、講演、資料等を、内容別に分類し、目録データも作る。

一月、編集委員に指名された。当初、「昔の資料を、ＣＤ化する意味があるのかな」と疑問をもった。航海学、機関学に関すること、海上衝突予防法、海難事故、練習船、教育、航海記、明治丸、等々。各巻を読み、分類を進めた。海運の動向、船員政策。「なるほど、ここで転機があったのか」とか。戦後の海運界の動きも、なぞることが出来た。戦争で、クラスメートを失った悔しさを綴った、手記の特集もある。ついこの間まで、ご健在だった方たちの、若かったときの座談会等、時代が蘇る。

作業中、メモを取った数点を記す。

二代目海洋会会長、小関三平氏の投稿。「学生の時、赤坂の『勝海舟』邸を数回訪ねた。幕末や維新の話をしてくれた。聞いたあと、一週間は、何となく、愉快な気持ちになった」とある。

大正十二年。関東大震災、横浜港に停泊していた大阪商船の『ろんどん丸』。航海士の寄稿文、「大火で、逃げまどう市民、海に飛び込んだ人達、二千人を、本船に救助した」と。

急激に発達した台風による、洞爺丸等の遭難。

作詞家、星野哲郎氏。昭和二十一年卒業。大型トロール漁船に乗船するも、病気で下船。腎臓を摘出、五年間の闘病生活中、その漁船が遭難。多くの仲間が亡くなる。鎮魂もあり、作詞家として、生きる決意をする。『兄弟船』『兄弟仁義』『みだれ髪』『寅さん』等、多くの歌を残された。

練習船で、教官が実習生に語る、実話をもとにした、今も読まれている『無人島に生きる十六人』（新潮文庫）。著者の須川邦彦氏は、商船学校の校長に昭和十一年就任、海洋会会長も務められた。

ＣＤの出来上がりを、ご期待下さい。

§春　（隅田川）§

日本には、春の歌が多い。

まだ寒さが残る、『早春賦』。「春は名のみの風のさむさや…」。信州、安曇野の早春の情景を歌った小学唱歌。童謡「春よ来い、早く来い…」が続く。光が明るくなると、『春の小川は…』に。

万葉集。大伴家持は「春の園　紅におう桃の花　下照る道に　出でたつおとめ」と歌う。柿本人麻呂は「春山の　友うぐいすの鳴き別れ　帰ります間も　思ほせわれを」。朝帰りの歌か。

清少納言は、「春は、あけぼのね」と。紫式部も「春の日のうららにさして　ゆく船は　棹のしづくも　花ぞ散りける」と。知らなかった。この歌から滝廉太郎は「春のうららの隅田川　のぼりくだりの船人が　櫂のしづくも花と散る　…」と、『花』を作詞。三番の「げに一刻も千金の…」は、漢詩『春夜』、「春の夜は、わずかな時間でも千金の値打ちがある」と。そして『朧月夜』へ。

与謝野晶子は「清水へ祇園をよぎる桜月夜　こよひ逢う人みなうつくしき」と歌う。松任谷由実の『春よ、来い』は、心に残る。八年前、東日本大震災の、被災地を支援するプロジェクトで歌われた。平成六年、ＮＨＫ連続テレビ小説、同名の主題歌だった。

「春よ　遠き春よ　まぶた閉じればそこに　愛をくれし君の　懐かしき声がする…」。

万葉、平安、明治、大正、昭和に、平成が、加わる。

【肥田浜五郎の幼少期から青年期】

正会員　澤間譲治

【肥田家とその父肥田春安】

肥田浜五郎の幼少時代を述べるにあたっては、彼の父『肥田春安』の事について若干触れておきたい。肥田浜五郎の精神的基盤がどの様な環境下で育まれたのかを知る一助になると思われるからだ。

肥田家の祖先は肥田二郎景明という者で、伊豆国田方郡肥田村に住んでいたが、戦乱を避けて、その子孫は賀茂郡八幡野村に移り住んだ。八幡野は伊豆東海岸の中間に位置し、伊東市の南方にある。

肥田二郎から何代目かの子孫が小田原の北条氏直に仕え、北条氏が没落後は、縁故を頼って駿府にて家康に仕え、又その後には水戸家に仕えたとの記録があるらしい。この子孫とは別に肥田本家は肥田二郎以来八幡野に居を構えていたが、春安の父春達（浜五郎の祖父）の代になって医師と神主を兼務する様になった。

春安も父の後を継いで医師と神主を務めた。医学の方は初めは漢方であったが、江川家（伊豆の代官）の侍医になってからは、多くの蘭方医家に接する機会を得て、次第に蘭方医に傾いていったらしい。春安は医学のかたわら、伊豆の国学者で歌人の竹村茂雄に国学や和歌を学んだが、その師である竹村茂雄は本居宣長に国学を学び、村田春海に和歌を学んだ「草莽の国学者」を任じた人物だったらしく、名誉栄達を望まず、百姓に文字を教え、文化を百姓にもたらすことに情熱を傾けた人だった。そして肥田家の者は春安ばかりではなく、その他の者も竹村茂雄に師事して大変深い交流を持った。

本居宣長と言えば、荻生徂徠と並んで、幕府の御用学問である朱子学の呪縛から日本精神を解放した学者の祖であり、幕末に至っての『尊皇思想』の淵源を惹起した思想家でもある。当時の御用学者である林羅山はその著『本朝通鑑』に於いて、「天皇の祖先は中国から来た」と書いて憚らなかったが、猛然とその中華思想に反旗を翻したのが本居宣長と荻生徂徠だった。その本居宣長に直接教えを受けた竹村茂雄に傾倒していた肥田家の人々が、どの様な思想的雰囲気を持っていたか、又その中で育った肥田浜五郎の精神的背景が如何様なものだったかを伺い知れると思う。

【肥田浜五郎の幼少時代】

肥田浜五郎の生年は、父肥田春安の「年譜覚書」によると、「文政十三年（１８３０）九月廿八日朝日之出　浜五郎誕生」とあり、名前は別名として為良とつけたらしい。出生地としては二説あり、父春安のふだんの居住地である伊豆国賀茂郡八幡野村という説と、春安が江川代官の侍医を兼ねていた為に江戸の江川屋敷に夫婦で滞留したこともあるところから、江戸本所で生まれたとの説がある。どちらにしても生後まもなく伊豆八幡野に連れて行かれ、そこで幼少期を過ごした事は間違いない。そこで痘瘡に罹ったらしいが、幸い軽症で済み、直ぐに元気になったようである。

その後、複雑な経緯があって、江戸の福村総右衛門のところに養子に出されるが、長じて福村喜代と結婚して肥田家に復籍し、喜代とは終生を共にしている。
浜五郎の少年時代は、肥田家の言い伝えによると「昼あんどん」と綽名されたとあるが後年の写真をみると、目から鼻に抜けるような、きりっとしまった好男子であるところから、誰かが嫌味を言ったのかもしれないとは言われている。浜五郎には実の兄弟が大勢いたが長命の者は少なかった。いちばん年長の長女「うら」は、文政元年に生まれ、六歳で夭折。次の文五郎は文化二年生まれ、五歳で夭折した。つぎの保太郎は文政三年六月生まれだが、長じて謙吉と称し、浜五郎とはもっとも心安く付き合ったとある。謙吉の後、敬二郎、菊三郎、泰藏と男子が生まれ、浜五郎は男子として五番目に生まれたので浜五郎と名付けられたようである。

【青年期の肥田浜五郎と江川英龍（江川太郎左衛門)】

この時代、伊豆半島では江川家が韮山に居住し、代官として治世に従事していたが、浜五郎の幼青年期には江川太郎左衛門（＝江川英龍）がその任に当たっていた。当時は日本近海に外国船がしばしば現れ、ときには薪水を求める事態も起こっていた。幕府は異国船打払令を制定、日本近海から駆逐する方針を採っていたが天保 8 年（1837 年)、モリソン号事件が発生。幕府は方針に従って打ち払った。英龍としても代官としての管轄区域には伊豆・相模沿岸の太平洋から江戸湾への入り口に当たる海防上重要な地域が含まれており、この問題に大きな関心と危機感を持った。その為英龍は長崎へと赴いて高島秋帆に弟子入りし、近代砲術を学ぶと共に幕府に高島流砲術を取り入れ、江戸で演習を行うよう働きかけ、正式に認められた。以後は高島流砲術をさらに改良した西洋砲術の普及に努め、全国の藩士にこれを教育した（韮山塾)。佐久間象山・大鳥圭介・橋本左内・桂小五郎（後の木戸孝允)・伊東祐亨などが彼の門下で学んでいる。水野忠邦没後の阿部正弘にも評価され、嘉永 6 年（1853 年)、ペリー来航直後に勘定吟味役格に登用され、正弘の命で品川台場（お台場）を築造（その技術は伊豆の巨石積み出しのための岸壁・護岸工事を継承したものであり、遡って三浦按針のドライドックに応用された技術だったかも知れない）した。銃砲製作のため湯島大小砲鋳立場を設立し、後の関口製造所の原型となっている。また鉄鋼を得るため反射炉の建造に取り組み、息子の代で完成している（韮山反射炉)。造船技術の向上にも力を注ぎ、さらに当時日本に来航していたロシア使節プチャーチン一行への対処の差配（ヘダ号造船等）に加え、爆裂砲弾の研究開発を始めとする近代的装備による農兵軍の組織までも企図した。浜五郎は幸いにも、父春安が江川家の侍医であった関係もあったと思われるが、江川英龍が主催する江川塾で、一般教養や砲術等を学び「敬慎第一、実用専務」の精神を叩き込まれた。神に対しても、人に対しても、学問に対しても、敬い慎むことを第一と心掛け、全て実際に役に立つことを理想とした。英龍の生活は極めて質素で、常に一汁一菜、その教育は厳しいこと、内容が開明的であった事で広く知られていた。

ここでみっちりと仕込まれ、浜五郎は特に優秀であったので、江戸へ送られて、川本幸民と伊東玄朴の下で蘭学を学ぶことになった。学費の一部は江川英龍が工面してくれた。時に浜五郎２５歳の時だった。

ここで浜五郎が青年時代に学んだ師である『川本幸民』と『伊東玄朴』についても若干触れておきたい。浜五郎が如何に素晴らしい学問的環境で学んだのかが解るからだ。

『川本幸民』は幕末の化学の始祖と言われた人で、「日本歴史大辞典」には以下の記述がある。

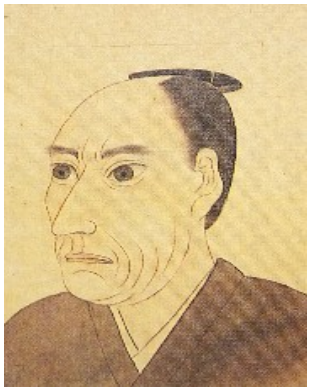
●川本幸民、１８１０―１８７１ 、幕末の医師、物理学者、化学者。名は裕、号は裕軒。はじめ敬蔵と称し、のち問民さらに幸民と改めた。摂津三田藩主九鬼侯の侍医周安の子。兄周篤に養われた。１８１７年（文化１４）須磨にゆき宇野某に和漢の医学を学ぶ、のちに江戸に出て足立長雋、坪井信道、青地林宗らに洋学を学び、林宗の三女季子と結婚、その後京都の学者にも教えを受けたという。１８３４（人保５年）三田藩医となり、翌年藩主に従って再び江戸にゆき、芝の露月町に住んで医業を開く。１８４８（嘉永元）年、マッチを試作、１８５０（嘉永三）年青地林宗の「気海観爛」を補うものとして、「気海観爛広義」（全五編）第一編を著わす。これはオランダ人ボイスその他の著書を訳述編集したもの。１８５６（安政１１）年幕府が洋学所を藩書調所と改称し、洋学教授をはじめたとき教授方職となる。１８５８（安政五）年、薩摩藩主島津斉彬に招かれ医学校を監督、これは１８５４年からであって、薩摩の桜島造船設立の顧問とされたものとも言われている。１８６２（文久二）年幕臣に列せられ、箕作阮甫とならぶ。明治維新に官を辞して三田に帰り、著述に従事。１８７０（明治３）年東京に出たが、翌年六月 １０日没。墓は浅草曹源寺にある。著はほかに「遠西寄略述」「理学原始」「地球理説」「舎密読本」「舎密真言」「化学部教」「化学通」「依百乙人身窮理」「薬論溯原」「硝石考」「暴風説」「汽船説」などがある。

川本幸民は要するに当時の最高の近代化学者であり、物理、医学にも造詣が深く、塾生も通算３００名を超えたと言われていた。因みに川本幸民の次男の妻の兄が浜五郎の養子となっている間柄であった。

浜五郎はさらに伊東玄朴の『象先堂塾』でも学んだが、記録によると、嘉永７年８月１３日入塾とある。伊東玄朴については以下の通り、西の緒方洪庵『適塾』と並ぶ東の『象先堂塾』と言われたように、やはり当代一二を争う蘭学者であった。

●伊東玄朴、寛政１２年（１８００）生まれ。肥前国神崎仁比山村の農執行重助の子で、のちに母方の血縁伊東祐章の養子となった玄朴は、十六歳で医をこころざし、２３歳のとき佐賀に出て、蘭方医島本龍嘯の門下生となって蘭書を学び、ついで長崎に出て、ド

イツ人シーボルトについて蘭医方を学んだ。文政９年（１８２６）江戸に上り、浅草に住居をかまえて蘭学の教授をしたが、まもなく一時帰郷し、再び江戸に来て、こんどは下谷長者町で医を開業、天保４年（１８３３）御徒町に移転、「象先堂」と称し蘭学を教えた。その間、オーストリア人ビショッフの内科書を蘭語に訳したものを和訳して「医療正始」と題して出版、これは邦文の系統的内科書としてとくに古いものの一つである。これによって名声ますます世にあらわれ、鍋島侯の侍医となった。安政５年（１８５８）抜擢されて将軍の奥医師となり、ついで法印を叙せられた。玄朴は早くから天然痘の予防に牛痘の種痘の有効なこと左力説し、江戸の蘭方医八十余名とはかって、神田お玉が池に種痘所を創設、ここで同業者相集まって医学を研究し、同時に蘭方医の養成につとめた。万延元年（１８６０）に種痘所は幕府の直轄となり、翌年には「西洋医学所」と改称し 、教授職がおかれ学生の教育の場として、玄朴はその取締を命ぜられた。のちに西洋医学所は「医学所」と改称、このとき幕府が倒れた。明治政府はこの「医学所」を接収して「大学東校」と称した。これが現在の「東京大学医学部」の前身である。
後年、玄朴は家督を養嗣子伊東玄伯（のちに方成と改める）に譲って横浜に隠居し、明治四年（１８７１） 七十二歳で没した。墓は東京台東区谷中の天竜院にある。



江川英龍

肥田浜五郎

川本幸民

伊東玄朴

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org